第０８講　「疑問詞」も「名節」をつくります！

「疑問詞」は、正確には、「**疑問代名詞**」「**疑問形容詞**」「**疑問副詞**」です

「名詞」「形容詞」「副詞」を意識しない、単なる「疑問詞」という呼称はやめましょう（例えば、「Ｗｈａｔ　ｔｉｍｅ　ｉｓ　ｉｔ？」の「Ｗｈａｔ」は「疑問形容詞」です）

「名節」をつくるのは、本来、「成節詞」です
本講では、**≪「疑問詞」が「名節」をつくる≫**ということで、**「疑問詞」が「成節詞（名節詞）」を兼ねている**ということを見ていきます
すなわち、**「疑問詞」兼「成節詞（名節詞）」**であり、**「疑問成節詞」「疑問名節詞」**とでも「命名」すべきものを見ていきます（もちろん、前講でみたように、「ｗｈｅｎ節」「ｗｈｅｒｅ節」等の「**疑問副詞由来の副節詞**」が「副節」もつくっています）

「疑問詞」と「品詞」・「文役」

例　　文	「品詞」と「文役」
Ｗｈｉｃｈ　ｉｓ　ｂｅｔｔｅｒ　？	「名詞」・「主語」
Ｗｈａｔ　ｈａｐｐｅｎｅｓ　？	「名詞」・「主語」
Ｗｈａｔ　ｄｉｄ　ｈｅ　ｓａｙ　？	「名詞」・「目的語」
Ｗｈｏ　ｉｓ　ｓｈｅ　？	「名詞」・「補語」
Ｗｈｏｓｅ　ｂｏｏｋ　ｉｓ　ｔｈｉｓ　？	「形容詞」・「役外名修」
Ｗｈｅｎ　ｄｉｄ　ｈｅ　ｇｏ　ｈｏｍｅ　？	「副詞」・「役外状況」・「時」
Ｗｈｅｒｅ　ｄｏｅｓ　ｓｈｅ　ｌｉｖｅ　？	「副詞」・「役外状況」・「場所」
Ｗｈｙ　ｄｉｄ　ｈｅ　ｗｒｉｔｅ　ｉｔ　？	「副詞」・「役外状況」・「理由」
Ｈｏｗ　ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｇｅｔ　ｉｔ　？	「副詞」・「役外状況」・「手段」

「疑問詞」のある『文。』については、**「疑問文」の語順ではなく、普通の『文』と同じ語順にすると、「名節」になり、「主目補」になる**ことができます
本書では、**「疑問名節」「ｗｈ名節」**と呼称します

たとえば、上の７番目の例文で、

「ｗｈｅｒｅ　ｓｈｅ　ｌｉｖｅｓ」とすると

「彼女がどこに住んでいるかということ」という「名節」になります

ある意味、「ｗｈｅｒｅ」は、「どこに」と「ということ」の２回訳されているとも考えられます

「成節詞（名節詞）」の「ｔｈａｔ」や「ｗｈｅｔｈｅｒ」を文頭にいちいちつけることなく、**「疑問副詞」に「成節詞（名節詞）」の役割も担わせている**のです

すなわち、**「疑問副詞」と「成節詞（名節詞）」の「兼任」**なのです（「**疑問名節詞**」）

上記の例文を「名節」化して見ましょう

「疑問詞」と「ｗｈ名節」

例　　文	日　本　語　訳
ｗｈｉｃｈ　ｉｓ　ｂｅｔｔｅｒ	どちらがより良いかということ
ｗｈａｔ　ｈａｐｐｅｎｓ	何が起こったかということ
ｗｈａｔ　ｈｅ　ｓａｉｄ	彼が何を言ったかということ
ｗｈｏ　ｓｈｅ　ｉｓ	彼女が誰であるかということ
ｗｈｏｓｅ　ｂｏｏｋ　ｔｈｉｓ　ｉｓ	これが誰の本であるかということ
ｗｈｅｎ　ｈｅ　ｗｅｎｔ　ｈｏｍｅ	いつ彼が家に帰ったかということ
ｗｈｅｒｅ　ｓｈｅ　ｌｉｖｅｓ	どこに彼女が住んでいるかということ
ｗｈｙ　ｈｅ　ｗｒｏｔｅ　ｉｔ	なぜ彼がそれを書いたかということ
ｈｏｗ　ｙｏｕ　ｇｏｔ　ｉｔ	どうやってあなたがそれを手に入れたかということ

≪**「疑問代名詞」＋「不完全な『文。』」**≫≪**「疑問副詞」＋「完全な『文。』」**≫という点を確認・認識してください（「疑問代名詞」自体が、「文役」となっています）

「関係代名詞」の「ｗｈａｔ」という考え方は不要、「ｗｈ名節」にすぎない

「　ｗｈａｔ　ｈｅ　ｓａｉｄ　」は「彼が言ったこと」と「意訳」されています

また、この「ｗｈａｔ」は、「関係代名詞」だと一般にいわれています

「ｔｈｅ　ｔｈｉｎｇ　ｔｈａｔ　ｈｅ　ｓａｉｄ」と同内容だということです

「ｔｈｅ　ｔｈｉｎｇ　ｔｈａｔ　＝　ｗｈａｔ」という「眉唾公式」まで用意されています（「先行詞」のない「関係代名詞」だなんて、何を血迷っているのでしょう）

確かに、「ｔｈｅ　ｔｈｉｎｇ　ｔｈａｔ　ｈｅ　ｓａｉｄ」の「ｔｈａｔ」は、「ｔｈｅ　ｔｈｉｎｇ」という「先行詞」があるので「関係代名詞」でしょう

しかし、「　ｗｈａｔ　ｈｅ　ｓａｉｄ　」には、「先行詞」は無く、上記の表の他の「疑問詞節」は「疑問詞」だといいながら、「　ｗｈａｔ　ｈｅ　ｓａｉｄ　」の「ｗｈａｔ」を殊更に「先行詞のない関係代名詞」だという必要があるのでしょうか

「意味的同内容」であるという現象面だけを捉えて異種のものを同一平面状で扱うという勇み足で、論理的統一性をみだすようなことをする必要はないでしょう

本書では、「ｗｈａｔ」を「疑問名節詞」と考えます

「彼が何を言ったかということ」（直訳）から「彼が言ったこと」（意訳）へと「意訳」しているだけのことにすぎないのに、文法的問題を無駄に複雑曖昧な解決へと持ち込むことなく、**単純明快に、できる限り「文法的根拠」をもとに「直訳」**をし、それから**「意訳」へ「変換」するという「段階」を確実に踏む**ようにすればよいのです

「ｗｈａｔ　ｈｅ　ｓａｉｄ」
「疑問名節」であって、「関係代名詞」によるという曖昧なものではない

「　ｗｈａｔ　ｈａｐｐｅｎｓ　」というのも同様に、「何が起こっているのかということ（直訳）」「起こっていること（意訳）」という「２語」の「疑問名節」です

「ｗｈａｔ　ｈａｐｐｅｎｓ」
２語でできている、「疑問名節」である

それから、「ｗｈａｔ　Ｉ　ａｍ」を「現在の私」と訳すのは、なぜでしょうか

「　Ｉ　ａｍ　～　」は、現在形なので「(今)」をつけて「私は（今）～です」と訳します

「　Ｗｈａｔ　ａｍ　Ｉ　？　」は、「私は（今）何なのでしょうか」と訳します

「名節」にした「　ｗｈａｔ　Ｉ　ａｍ　」は、「私が（今）何であるかということ」と「直訳」し、それを「現在の私」と意訳されているのです

「ｗｈａｔ　Ｉ　ａｍ」
単なる「疑問名節」であり、「意訳」に惑わされ振り回されるな

ただの、「*熟語丸暗記*」よりも、多少「**論理分析**」してみてはいかがでしょうか

それでは、これに類する主な「疑問名節」と「意訳」をあげてみましょう

「ｗｈａｔ」の「疑問名節」と「意訳」

例　　文	意　　訳
ｗｈａｔ　Ｔａｒｏ　ｗａｓ	過去のタロー
ｗｈａｔ　ｈｅ　ｗａｓ　ｔｅｎ　ｙｅａｓ　ａｇｏ	１０年前の彼
ｗｈａｔ　ｓｈｅ　ｕｓｅｄ　ｔｏ　ｂｅ	かつてそうであった彼女
ｗｈａｔ　Ｉ　ｈａｖｅ　ｂｅｅｎ	さっきまでの私
ｗｈａｔ　ｔｈｅｙ　ｗｉｌｌ　ｂｅ	将来の彼ら
ｗｈａｔ　Ｊａｐａｎ　ｓｈｏｕｌｄ　ｂｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｆｕｔｕｒｅ	未来におけるあるべき日本

「疑問名節」であることを認識して、「文法的直訳」を検討してみてください

「ｗｈ節」と「成節詞」

「ｗｈ節」は「名節」ですから、「主目補」になれます

ここで、少し注目してもらいたいのが、「後属役」や「目的役」です
（「役」とは、「他動詞」や「成句詞」の「目的」になっている「語・句・節」の総称です）
「ｗｈ節」は、「成句詞」の「後属節」や「他動詞」の「目的節」には一般的になる
ことができます
ただ、**「ｉｆ節」は「成句詞」の「後属節」にはなれません**
また、**「ｔｈａｔ節」も、一部例外を除いて、原則的には、「成句詞」の「後属節」にはなれません**

○　「成句詞」　＋　「ｗｈ節」

×　「成句詞」　＋　「ｉｆ節」

▲　「成句詞」　＋　「ｔｈａｔ節」
例外の「成句詞」　「ｅｘｃｅｐｔ」「ｂｕｔ」「ｂｅｓｉｄｅｓ」「ｉｎ」等

これは、使用者の習慣であって、論理ではないので、覚えるしかありません

「ｗｈ句」とは

「ｗｈａｔ　ｔｏ　ｄｏ」「ｗｈｅｎ　ｔｏ　ｇｏ」「ｈｏｗ　ｔｏ　ｄｏ」等は、見慣れているでしょう
これらは、**「ｗｈ名節」の変形**であり、**「主語」の表記が不要な場合**で、「不定詞」を使った「**軽量型**」の表現です
「**ｗｈ準名節**」「ｗｈ名句」と呼称されるようなものです
機能的には、「ｗｈ名節」と同じで、「主目補」になれます

「ｗｈ名節」
　ｗｈａｔ　Ｉ　（ｓｏｕｌｄ）　ｄｏ　（私が何をすべきかということ）

「ｗｈ準名節」「ｗｈ名句」
　→　ｗｈａｔ　ｔｏ　ｄｏ　（何をしたらよいかということ）

（「第１１講」参照）

「疑問詞」が「副節」をつくる

本講では、「疑問詞（名形副）」が「名節」をつくると銘打ってまいりましたが、**「疑問詞（副）」が「副節」をつくる**場合を補足させていただきます
おなじみの「ｗｈｅｎ～」以外の、他の有名な例文をあげます
　Ｗｈｅｒｅ　ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　ａ　ｗｉｌｌ，ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　ａ　ｗａｙ．

「疑問副詞」の「ｗｈｅｎ」「ｗｈｅｒｅ」の他には「疑問詞」が「副節」をつくる場合は限られています

また、「ｅｖｅｒ」を語尾につけることにより、「譲歩」等の意味で「疑問詞」が「副節」をつくる場合を拡張させています（「複合関係詞」といわれているものです）
これらの点は、細かい事項なので、別巻で詳述する予定です

最後に、ちょっと、今さらながら確認ですが、
「Ｗｈｏｓｅ　ｂｏｏｋ　ｉｓ　ｔｈｉｓ？」と
「Ｗｈｏｓｅ　ｉｓ　ｔｈｉｓ　ｂｏｏｋ？」との「文法的違い」は大丈夫ですよね

本講までにより、「品詞」の３形態である、「語」「句」「節」が出そろったので、次講では、より大きな視点を持って、「品詞」と「文役」についてまとめましょう